

## 偏光玩具

高岡 啓次郎

(一)

北海道美唄の炭鉱町に生まれ、少女時代から小樽で過し、七十過ぎの晩年を苫小牧に移していた芦川雪乃が、九十年間の生涯で最後に欲しかったものは一本の万華鏡だった。

入院してまもなく枕もとに三男の陽一をよび、弱々しい声をふりしぼってそれを頼んだ。陽一は意外ともいえる母の申し出に、どこかやるせない想いをいだいたが、痩せ衰えた母の手のひらを軽くたいて快諾した。

さつそくその日から市内の玩具屋をまわった。ところが簡単に手に入ると思った品物は容易に見当たらなかった。夕方になってから妻の佐代子が何人かの友人に電話して情報を得てくれた。

「あなた、千歳の山岸さんという古美術店には置いてある

かもしれないって」

「骨董品でも仕方がないな。電話してきいてみようか。あればいいのだが」

佐代子がすぐに問い合わせると、確かにひとつだけあるという返事を得た。価格も手ごろなものだった。次の日、陽一は雪かきをすませたあと佐代子を伴って車を走らせた。何日も降り続けている雪が道路に大きなワダチをつくり、恐竜の背骨みたいな車道からハンドルを握る手に衝撃が伝わってくる。泳ぐように蛇行しながら千歳にたどりついたふたりは古美術店で昭和初期のものかと思われる薄紫の布地にカスミソウの花びらを刺繍した古い万華鏡を手にし、それを三千円で買い求めた。

「すぐに届けてあげましょう。きつとお母さん待っていると思うわ」

陽一は睡眠不足の蒼白い顔をわずかにはころばせ、それにしても、とつぶやいてから意味ありげにため息をついた。「何かしてほしいことがないかという問いに、間髪入れずに欲しがったのが万華鏡とは、いったいどういうことなのかなあ」

佐代子はすこし涙をにじませた瞳をしばたかせた。雪乃のことで心労がかきみ、ただでさえ目が充血している。

「よほど何かの思い入れがあるのでしょね。幼いころに遊んでいらしたでしょうし、懐かしいものを覗いてみたい

のかもしれないわ」

苫小牧市内に戻ると、クリスマススイブの買い物客が大型店の駐車場にひしめきあっていた。言葉数が少ない夫に佐代子は空白をうめるように語りかけた。

「でも今の時期が冬でよかったのかしら。あなたのお仕事が忙しいときなら大変だったでしょう」

「確かにそうだな。不幸中の幸いだったかもしれない」  
うなずいた陽一は車を大型店の駐車場に入れた。それは自分に対する気休めにすぎないことは分かっていた。今回の入院は深刻な事態に発展しそうな予感がする。

陽一は三十歳で独立していらしい兄弟で左官屋を営んでいる。三月から十二月なかばまで工事をし、雪がふるのに合わせて休眠するという生活を二十七年間続けてきた。冬場は足りない収入をおぎなうためにときどきアルバイトをする程度で、時間的な余裕は十分にあるのだった。

ふたりは紙オムツや必要な小物に加え自分たちの遅い昼食用の食べ物を買求めた。車の中でパンや握り飯をかじりながら母親が入院している病院についたのは午後の三時を過ぎていた。

病室に入ると雪乃は窓からそそぐ冬の西陽を頬にうけながら目を閉じていた。眠っているのを起こすことにためらいを感じながら陽一がそつと枕もとにふれると雪乃は皺だらけの頬を動かして目を開けた。

「お母さん、頼まれたものをもってきたよ」

陽一が言うと雪乃はなんとも嬉しそうに微笑し、血管の浮き出た細い手で丸い筒を無言で握りしめた。

「さあ見てごらん、これこうして」

陽一は母親の手をとり、薄紫の筒を目もとにもっていった。その日から芦川雪乃は、ひまさえあれば子どものような表情をうかべながら万華鏡を覗くようになった。

入院してからの雪乃は、九十年間の疲れをとるよう検査と食事のとき以外は眠ってばかりいた。しかし胸や背中から痛みがたえず走るので深く眠っているとはいえない状態のはずだった。

すこしでも気をまぎらわせればと家族がテレビをつけても、あれほど好きだった大相撲や韓国ドラマを見ようともしないし、飽きもせず聴いていたテーマ曲をテープに吹き込んで耳もとに持つていっても、何の感動もしめそうとしなかった。

だが万華鏡を手にしてからは大きな変化があった。起きているわずかな時間を、その狭い筒の中の世界を見ることに時間を費やしはじめたのだ。そのときの雪乃の表情には不思議な光があった。

しかし長時間それを見ていることはできないようだった。せいぜい二分か長くて三分もすれば腕が痛くなる。そんな軽い偏光玩具を持つことさえ今の雪乃に残された体力には

切ない行為だったにちがいない。ダラリと腕をおろしたあととは、その視線が果てしなく遠くにいき、別の世界にいるみたいに表情がうつろになってしまふ。

そんなとき横から雪乃の瞳を覗くと、ゆらゆらと得体のしれない光が動いている。そのさまは、ロウソクの火がかすかな風にゆれるように、雪乃が最後の力をふりしぼって命の残り火を灯しているかに見えた。

## (二)

いったいどういう訳で私はここにいるのだろうか。芦川雪乃は、自分がなぜ普段と違うベッドにいるのか分からなかった。いまだに頭が朦朧としているし、体中を何本もの管や針が通っているので動くこともできない。声を出そうとして顎の筋肉を動かそうとするが、その力さえも湧いてこなかった。

すこしずつ覚醒していく意識のなかで雪乃は考えつづけた。私は強い麻酔をかけられているのだろうか。私の周りを白衣で身をつつんだ人々が気忙しげに通つていく。あきらかに病院に違いないのだが、今まで来たことがある診察室とは全く違っている。さまざまな医療機器があり、医師や看護師たちが緊迫した表情で走り回っている。

前にテレビでこんな部屋を見たことがある。そうだ、こ

ということが重要だろう。

三センチ四方の小さな筒の中には彼女にとつて最後の世界があった。その中には鮮やかな色彩が生き物のように大ききや形を変えて動き回っている。それは散りばめられた寶石であり、果てしない偏光の花園でもあった。ほの暗い照明の下で見ると、万華鏡の中は真夏の夜空に様変わりした。その小さな空間には長い年月のあいだ脳髓の底にうずもれていた記憶が映し出されただけでなく、現在と未来にかかわる出来事の背後にある隠れたものが見えるようになり、聞こえないものが聞こえたりする。

それはサバアン症候群とも似た現象で、脳のほんの一部だけがとびぬけて覚醒されているのだ。離れて話している人たちの声が近くに聞こえ、心の中でつぶやいていることが手に取るように解ってしまうのだ。雪乃はそこで見聞きしたことを静かに話し始めた。他人に聞こえるでもない声で自らの内なる人に話しはじめたのである。

## (四)

誰もがひどく慌てたようすで私の周りを歩き回っている。この部屋に来たということは、私は相当に危ないのかもしれない。病室の中を見まわそうとしても思うように首を動かすことができない。

これはおそらく集中治療室だ。私は救急車で運ばれたのだ。頭がぼんやりしているが間違いない。あの日、確かに運ばれたはずだ。私はまだ死んではないようだ。何人かの看護師は見たことがある。ここは私がいつも薬をもらいにくるK病院だ。

## (三)

緊急入院した雪乃には、少し前から不思議な現象が起きていた。死が近づくにつれ、いちじるしく身体的能力が衰えたのと反比例して、ある種の洞察力が研ぎ澄まされてしまったのだ。雪乃は自分の脳裏に次から次へと浮かび上がってくる映像や思考にたじろいだ。

しかし雪乃がもともと特殊な能力を持っていたわけではない。確かに幼いときから並外れた思考力を有していたとはいえ、人の心の中まで読めるということはなかった。そういう霊的な力とは無縁の生涯を送ってきた。

彼女がいつもの自分と違う洞察力を身に付けたのは息子からプレゼントされた万華鏡を覗くようになってからの時期と符合している。その古い偏光玩具がいかなる作用をもたらしたかを解き明かすことは不可能だろう。それよりも人生の終末の時を迎えようとしていたひとりの女が、万華鏡をとおして自分の周りで起きていることを知ろうとした

何人かの見覚えのある顔が見える。いつも励ましてくれる看護師長もいるが、見たことがない医師も歩いている。ずいぶん若くてハンサムな先生だ。数字が浮かび、建物や卒業式の映像がよぎる。

G 医大を二十九番目の成績で卒業している優秀な先生のようにだ。私生活では痩せた色黒の看護師とできている。同時に茶髪で小柄な目の大きな看護師ともつきあっている。最初のころは美人で小柄の方が優勢だったようだが、あのツンとすました感じは嫌われはじめている。

色黒の看護師は物腰が優しく性格が良いからホッとするのでろう。いったい三人はこの先どうなるのかと思ってしまうが、こんな状態の私が心配することではない。他人の私生活をのぞく余裕は今の私にはないはずだ。

私には見たいものがある。残されたわずかな時間をついやして、自分をとりまいて最後の事象をしつかり見届けたいのだ。向こうに日めくりの暦が見える。今日は二〇〇八年一月六日なのか？ もう三週間が過ぎたなんて信じられない。私が運ばれたのは去年の十二月十七日のはずだ。この日の朝に私は完全に動けなくなり病院へ運ばれた。それより十日ほど前から背中にもいつもより強い痛みを感じていた。脇腹にも何かが食い込むような衝撃がはしり、体じゅうの関節から古い家具がきしむような音がしたのは気のせいではなかった。

息子の家で一週間ほど養生していたら痛みはかなりやわらいできた。私はそろそろ自分の家に帰らなければいけないと思った。家には私の世話を必要としている独身の次男がいるのだ。もう六十歳にもなる五体満足な息子を、余命いくばくもない九十歳の私がなんで世話しなければいけないのだろう。もういいかげんに卒業させてほしいが、やはり気になるのは母親の業なのだろうか。

今ごろ修也は何を食べているのだろう。洗濯物もさぞかし溜まっているに違いない。ゴミは決められた日にちゃんと出しているだろうか。胃の調子が悪いといっていたけれど大丈夫なのだろうか。友人を作らず、隣人とも係わり合わないで何年もひきこもっていた。今は弟のところでもかろうじて勤めてはいるけれど、とうとう結婚できずに歳をとってしまった。真面目なお金だけはしっかり貯めたようだけど、悪い女に騙されはしないか心配になる。

母親とはなんと因果なものだろう。その生涯を通じて心配症という病からけつして抜け出られない生き物なのだ。そんな自分にほとほと疲れてしまっている私なのだ。

修也が心配だから家に帰ると私がいうと、陽一は明日にしたほうがいいと言った。私がいまだ調子が悪そうに見えるのだから。だが私は心配な気持ちを抑えられずに帰宅してしまった。

家の中は思ったとおりゴミだらけになっていた。洗濯機

からは汚い作業着があふれているし、台所は食器の山だった。私が家にいるあいだは週に三度ほど家政婦さんが来てくれたけど、私がいけないときは誰も来ないのだ。

わが家に帰ってから、私はできるだけ無理をひかえた。自分ではなるべく動かないようにして口うるさく修也を使っていた。でも性分というものは変えられない。思うとおりにやってくれないときは、つい苛ついて手をだしてしまう。

買い置きしておいた野菜もいたみかけているし、賞味期限が切れてしまった食材もある。戦争のひもじさを経験した私には少し日付が過ぎても捨てられないのだ。何ひとつ無駄にはできないので、匂いを嗅いで何でもないので調理した。

台所のシンクに思うように手が届かなくなったので厚い台の上に乗るが、そうしてさえ包丁を動かすのが大変だった。高いところから鍋をとりペランダから新聞紙に包んだ野菜を運ぶのは修也にやらせたけれど、寝る前の歯磨きが終わった後にどうしようもない痛みが襲ってきた。

何をしたのが悪かったのかと考えたら、思い当たるのは漬物だった。それをしてから激痛が走るようになり、動くのもままならなくなった。その日の夜中のトイレは修也に支えられてやっとなら行ったが、死にたいほどの苦痛が全身をすくぬき、そうして問題の日の朝がやってきた。

大袈裟な言いかたかもしれないけれど、私にとつては確

かに運命を左右する日だった。その日から九十年の生涯で一番大変な入院生活を送ることになった。子どもたちの誰もが、いよいよ私の命が危ないと感じたに違いない。

目覚めたときから私の体にはかつてない脱力感と痛みがあった。やつとの思いでベッドから出て椅子に腰掛けてみたけれど、体がくの字に折れ曲つたまま、その姿勢を直すこともできなかつた。息をするのがやつとで、どうしたのかという修也の問いかけに声を出して答えることもできなかつた。

午前十時ごろに知らせを受けた陽一夫婦が来てくれた。私は嫁の佐代子さんのことを、親しみをこめてサヨちゃんと呼んでいる。

「母さん、いつたいどうしたの。そんなに顔がむくんでしまつて」

陽一が叫ぶように言った。サヨちゃんも私を見た途端にひどいショックを受けてしまつて泣きそうな顔になった。このとき私はぼんやりとしか目をあけていられなかつた。

「大変だ。すぐ救急車を手配しなければ」

陽一は急いで受話器をとり、私の症状を説明した。それが来るまでの十五分足らずの時間が途方もなく長く感じられた。救急隊員が毛布で私の体を包み持ち上げたときの激痛で気を失いそうだった。

実のところ、私は生きることにつつかり倦み疲れていた。

もう休みたい。いいかげんに終わりにしたい。どれだけ強くそう願っていたことか。それに類することを口にする陽一は怒つたような目をして、人間にはみんな天命がある。だからそんなことを言わないでくれと言う。

息子の言うことは頭では分かる。でも四六時中襲つてくる痛みに耐えながら生きるのは辛すぎる。運動神経は死んだように鈍くなっているのに、どうして痛みの神経だけが敏感なのだろうか。そのことを私はしばしば不思議に思ってしまう。おそらく痛覚というものは人間にとつて最も基本的な感覚なのかもしれない。

## (五)

病院に担ぎ込まれてK病院の整形外科にきた私が最初に受けたのは定番のレントゲン診断だった。数年前と同じように圧迫骨折で骨が折れているに違いないと思つた。私が考えていることを陽一が代弁して看護師に伝え、すぐに写真撮影に入った。

そのときの扱いは乱暴だった。私の激痛の叫びに対して顔色ひとつ変えることもなく、係の者は冷たく固い台の上で容赦なく私を転がした。それから別のベッドに固定され、検査のためにと称してたつぷりと血液を採取された。枯れ枝のように小さな体の私から、あれほど多くの血をとる必

要があるのかと思うほどの量だった。

そのあと診察も受けずに病室に運ばれた。陽一が看護師長に「レントゲンの結果を知りたいので説明を受けたい」というと、師長は「分かりました、先生に伝えます」と答えて病室から出ていった。

医師からの説明があったのは三時間もあとだった。しかしそれは説明というにはあまりにもお粗末なものだった。そのときの担当医師との面会は、その後の入院生活の暗い前途を暗示させた。

整形のE医師は、どうしてなのか病室に無然とした表情で現れた。私は長年K病院に通っていたが初めて対面する医師だった。四十歳前後の背の低い男で、歌舞伎役者が舞台で見栄を切るときみたいに口がへの字に曲がっていた。目が細く、顎が張り出していて、濃い髭のそりあとが我的強さを感じさせる。

医師は眉間に皺をよせ、こんな忙しいときに時間をとられるのがさも煩わしいという顔をしてぶつきらぼうに言った。レントゲンではどこも悪くない。詳しいことはまだ検査をしていないから分かるわけがない。そんな意味のことを突き放すように言い放った。

そう感じたのは私のひとりよがりではなかった。陽一夫婦と孫娘が啞然とした表情で医師を見ていた。陽一の目にはあきらかに怒気があった。三人ともこの医師の態度は何

だろうと思っっているに違いない顔だった。

普通に話せたら私は言いたかった。レントゲンの結果を知りたいと思うのは家族として当然ではないか。朝一番でかつぎこまれ、あれから何時間も過ぎているのだ。この若い医師はこんな答え方しかできないのか。

質問も許さずに医者が帰ったあと、孫娘の由紀が小さな口を尖らせ陽一に飛びつくようにこう言った。

「お父さん、よく怒らなかつたわね」

ふだん短気な父親にしては珍しいと思ったのだろう。

「ムカツときたけど、最初から喧嘩をするわけにはいかなからね」

陽一はそう答えていたが相当に腹をたてているのは明らかだった。

そのとき私を含めて全員が思ったのではないだろうか。あの医師が担当なら、これから先が思いやられる。私を含めて誰もが、遠い道のむこうに重々しくたれこめる暗雲を見たような不安な顔になっていた。

そうして始まった入院生活だったが、看護師たちが思いやり深いのは救いだ。一人を除いてと言っておく。大部分の看護師たちは言葉にもふるまいにも私のような老人を扱う技術と優しさを身につけていた。彼女たちの気遣いは真綿のように柔らかな言葉となつて私を包んでくれた。「お婆ちゃん痛いけど頑張つてね」

きれず声を出していたときに看護師は何と言ったか。

「うめき声は死ぬときに出すものだ」

そんなことを病人に向かって平気で口走つたのだ。私がどんなに悲しく悔しかったことか。あれはイジメ以外の何ものでもないと思つたが何も言い返す勇氣はなかつた。

その看護師を私が嫌いになつた決定的な理由はもうひとつある。それは私の前で息子の悪口を言つたからだ。理由は陽一があのE医師と患者の扱い方で言い合いをしたからに違いない。

でも患者に対して家族の悪口を面と向かつていう看護師などきいたことがない。やはり二人は怪しいとしか考えられないではないか。患者の家族のことをどう思おうとそれは看護師の勝手だ。けれど、そのことは苦しんでいる患者に話すことではないはずだ。

私は今まで数えきれないほど入院生活をおくつたが、これほどまでに弱つたことはなかった。看護師たちが姿勢を変えに来てくれるが、反対側にあるものはいっさい手にとることができないのだ。水を飲みたたくてもボトルに手が届かず、ティッシュペーパー一枚さえ箱から引き抜くことが不可能だ。そのたびに看護師を呼ぶわけにもいかず、我慢せざるをえなくなる。

二十四時間が途方もなく長く感じられる。テレビも雑誌も見えない。そんなとき思い立ったのが万華鏡だ

ほとんどが例外なくそんな声をかけてくれる。中には、「お婆ちゃん可愛いねえ」といつて皺だらけの頬を撫でていく看護師もいる。この歳になつて曾孫のような子から可愛いねと言われると何だか変な気持ちでして、つい幼児帰帰したくなつてしまう。

さつきふれた例外の看護師は、このあと何度も問題を起さずE医師に妙なほど肩入れしていた。私がちよつとも不満めいたことを口にする、キツと目をすえてE医師を擁護するのだ。

背が高くスタイルも顔立ちも悪くない看護師だが、素朴な優しさからくる笑顔がない。どうしてE医師のことにかぎって庇うのだろう。あの二人はデキテイルに違いないと私は思つてしまつたが、わざわざ万華鏡をのぞいて確かめる気にはならなかつたし、そんなことのために貴重な玩具の靈力を浪費してなるものかと思つた。

そうなのだ。私はこのころから陽一が手に入れてきた万華鏡が不思議な力があるのに気づいていた。

私がこの看護師を嫌いになつた理由はそれだけではない。陽一やサヨちゃん、私の痛みが少しでもやわらぐように首や背中の下にタオルやクッションを詰めてくれる。だがこの看護師はそれが邪魔だといつてサッサととつてしまうのだ。それについて患者の希望を尋ねようともしない。

さらに昨日こんなこともあった。私が背中中の激痛に耐え

った。ほしいものがないかと尋ねられたとき、私は即座にそのことを息子に告げたのだった。

(六)

老いた役者がある日、この舞台が最後ではないかという気持ちをいだくように、今回の入院は最後になるという確信めいた予感が私にはあった。

鎮痛剤を点滴しているのに激痛はいっこうになくならない。食事もほんのわずかしかとれない。いつさい寝返りもうてない。足には何の力も入らず、足首さえも上げられなくなつた。

私はいよいよ歩けなくなるのが分かつた。自分に残されている命の灯火がまた一本消えてしまったのを、いやがうえにも自覚させられた。

入院して何日目に小樽にいる長女が看病に来てくれた。登美江がどれほど大変な中を来てくれたか私には分かつていた。

もう六十八歳にもなるこの娘は病気で動けない夫のために一日十二時間近く働いている。過労で激しい喘息にも襲われている。陽一が、姉ちゃんはこのままなら過労死してしまうと言つたけれど、それは大げさではないと私も思う。私は自分が死にそうだけれど、娘にだけは先に逝つてほ

しくない。最近ことに深刻な悩みを抱えているのを私はずっと知っている。行方不明になつている長男のことはさぞかし心配なはず。しかも自殺を予告する電話まで入つたなんて。そのことでどれほど心を痛めているかを考えると私は本当にたまらなくなる。そんなことをひとことも言わずに来てくれた。あなたの一日の看病は他の人の十日分の労苦に匹敵すると私は思っている。

万華鏡を覗いていると小さいときの登美江が見えてくる。小樽の花園町で時計屋をしていたとき、五歳ほどのあなたが着物を着て店にいますと、よく進駐軍のアメリカ兵が、「おお、何と可愛いことよ！」

というような英語をしゃべつて何度もあなたを抱き上げていた。あのとき私は二十七か八くらいだつた。あなたはアメリカ兵と記念写真をたくさん写した。その着物姿は間違いなく太平洋を越えたはず。

好奇心のかたまりだつたあなたは父親の真似をして時計をいじるのが好きだつた。夫はわざと壊れた時計を玩具として三歳にもならない娘に与えていた。

ある真夜中に階下で音がしたので、私は不審に思い、おそるおそる階段を下りていった。店の中を見たときの驚きといつたらない。あなたが拡大鏡を片目にかけて小さな手にネジ回しを持ち、時計を修理していたのだから。私は信じられなくてすぐ夫を起こしにいった。

「あなた大変よ、登美江が下で時計を直しているわ。夕鶴のおつうさんみたいに。あの子は私たちのために働いてくれていたのかしら」

「何をばかなことを」

といて夫は跳ね起きた。

「本当だから見てちょうだい」

私の声にうながされ、夫は眠い目をこすりながら階段を下りたのだが、登美江を見た途端に叫んだ。

「大変だ！ あれは客から預かつている高価な時計なんだぞ」

夫はものすごい勢いで登美江の手から時計を取り上げた。そのあいだ何ともいえないあどけない表情を登美江は見せていた。

「ああ危なかった。壊れたら大いにまずかつた。このいたずら娘が」

夫はそういつて登美江を高く抱き上げて笑つた。

戦争が終わつたあとの数年間、小樽に大挙してやつてきた進駐軍のおかげで時計店は予想外に繁盛した。そのころ私たち夫婦は若く、それなりに仲が良かった。

一番下の陽一はまだ生まれていないけれど、十一年の間に私は五人の母親になつていった。一人が医者への誤診で亡くなつたときは、しばらく抑うつ状態になつたけれど、戦火を無事にくぐりぬけ、家庭的な意味においては比較的平穩

といえた。

しかし何年かして進駐軍がいなくなり小樽の街に急激な不景気が訪れてからは、次々と不幸の波が押し寄せてきた。詐欺にあつた夫は多額の負債をかかえて花園町の店を閉めた。

雨漏りのたえない長屋に移つてからも、生活の苦しみは加速度的に増してゆき、夫は精神的にも経済的にもいきづまつて出奔し、やがて私たちは離婚した。五人の子どもを育てる責任の何もかもが私の小さな肩にのしかかつた。

そのころ登美江は中学生ながら継続的にアルバイトをして家計を助けてくれた。弱音ひとつ吐かないで夜遅くまで働きながら、時間を生み出して勉強していたのを覚えている。襲つてくる睡魔と闘いながら鉛筆を動かす音が真夜中までしていた。ときどき机に臥してノートに涎を流していたのを私は忘れない。

その頑張り屋の精神は今でもまつたく変わっていないと私は思う。でも願わずにはいられない。どうか無理し過ぎないでくれ。あなたはまたまた元気でいなくてはいいはず。できれば長生きして、あなたの子どもや孫たちの行く末を見届けてほしい。

あなたがときどき生きていることに行き詰まり、いつそ死んでしまいたいと思うことがあるのを私は知っている。でも思い出すのよ、今までどんな困難にも打ち勝つてきた

ことを。あなたならやり通せる。今はまだ大変だろうけど、私のように長生きして幸せなお婆ちゃんになってちょうだい。

あなたがこのあいだ置いていってくれたピンク色の刺繍が入ったハンカチ。それはいつも枕元にある。私だと思つてねと帰り際にあなたは言った。陽一はいつもそれを冷たい水で濡らして熱っぽい皺だらけのオデコにのせてくれる。

## (七)

このころ嫁のサヨちゃんが倒れた。間違ひなく疲れと心労のせいだと思う。でもサヨちゃんは他のことでも心を痛めていたようす。万華鏡を覗いたら、若いときのあなたが現れてご両親を看病している姿が見えた。

あなたは三十二歳の若さで同じ年にご両親を相次いで亡くしている。あなたは姉妹たちの中で一番よく世話をしていたのに、それでも後悔があるようね。

「そのころの自分の介護はけつして十分ではなかったと思ふ。小さな娘をかかえて疲れがたまり、両親の看病に心をこめられない日もあったから」

あなたが陽一に泣きながら話していたのが聞こえた。それであなただけが眠っているとき、私の手を握りながらしきりに謝っていたのね。苦しんでいる私を看病しながら今

つてくれた。

一緒に暮らしているときにはよく喧嘩したけれど、いざとなれば素朴な優しさを示してくれる。不器用で世辞めいたことを少しも言えない息子なのに、

「痛いのかい、可哀相になあ、早くよくなつてね」

涙声で言われると胸に堪える。そんなふうに話しかけてくれたことはなかったから。六十歳にしては年齢よりくたびれた感じの修也なのに、私が苦しがつているとき背中や足をさすってくれる。やりかたは巧くはないけれど気持ちにはありがたい。今までかけられた苦勞の数々を忘れてもいいかという気にもなってしまう。

思えば随分あなたのことを心配した。引きこもりになつて何年も家に閉じこもっていた時期があつたわね。癩癩を起したあなたから殴られたことも何度かある。私が目の周りを黒くしていたとき、陽一があなたに手をあげたでしょう。陽一は私のためにやつたのを忘れないで。

何度も私のことが原因であなたたちは激しく衝突しましたね。でもあなたは少しずつ立ち直っていった。確かに苦勞はさせられたけど、私が晩年をむかえてからはそれなりに助けてくれたと思う。取れない物を取ってくれたり、夜中に寒くないかと言つては毛布をかけてくれたり、必要な買い物にも行つてくれた。

仕事で稼いだお金だつて、俺はあんまり使わないからと

は亡きご両親にも謝つていたのね。

私はそれが分かつたとき涙を抑えられなかつた。あなたが苦しんでいることが哀しかった。私のことがきつかけで、あなたが昔のぬぐい去れない悲しみを思い出し、良心の痛みにさいなまれるなんて。そんなこともあなたの心労を深めたに違ひない。

あなたは繊細でとりわけ人を思いやる気質にとんでいる。危険なほどの同情心と私は言わせてもらおう。ときに優しくすぎるといつても過言ではないと思う。あなた自身をもっと大切になさいね。自分を必要以上にいじめてはいけないと思う。私も昔はそれで何度も病氣になつた。三歳の男の子を亡くしたときもそうだった。自分を責め続けて気が狂いそうになつた。

あなたは若いときの私にどこか似たところがある。だからどうか自身をいたわつてちょうだい。たまには自分にご褒美をあげなければ。そして他の人に優しくするように自分にも優しくしてあげなければ。何と言つても自分の肉体とは一番長くおつきあいするのですから。

あなたが急に立てなくなつて、激しいめまいに襲われたときは心配でたまらなかつた。私のことがきつかけであなただがどうかなくなつたらと思つと辛かつた。あなたが病院に来られないあいだ、修也が毎日二回も来てくれた。私がつまなそうな顔をする、冬で仕事で暇だからいいんだよと言

いつて余るくらい家に入れてくれた。気が合わなくて互いに不満を感じるが多かつたのも事実だけれど、それも今は何もかも思い出になりつつある。

思えば私は長男を三才で亡くしてから、とりわけ神経質に修也に接した気がする。いつまた息子をなくすかもしれないという恐怖でバランスを欠いた接し方をしてきた可能性がある。あなたが二歳で小児結核になつたとき、保険のきかないドイツ製の注射を何十本も打つたのはそんな恐怖心の表れだつた。そのために大きな借金を抱えてしまい、それが夫の精神的崩壊のきっかけになるなんて思いもしなかつた。

あのころは忘れたい思い出が多い。信頼していた医師の誤診がもとで幼い息子を失つたけれど、同じ病院で前に次女の昭江が小児ぜんそくで危なかつたとき助けてもらったことがあるから訴えることはしなかつた。でも、その痛手から三年くらいうつ状態になり、同時に過度の心配性になつてしまった。その傾向は六十年以上過ぎた今でも引きがつている。

## (八)

このあと私は誤嚥性の肺炎にかかつた。熱が引かず、ますます体力が落ちていのが分かる。腕が魚の干物みたい

に細く皺だらけになっている。呼吸が苦しいので酸素マスクのある部屋に入れられた。

そのとき千葉にいる三女の弘江から手紙がきて、陽一は枕もとで読みかせてくれた。私は急に安らかな気持ちになれて目を閉じた。ひとつも聞き漏らすまいと耳をすませた。

お母さん。その後お体の具合はいかがですか？  
今度は肺炎と聞いてびっくりしましたが、軽かったと聞き少し安心しました。でも、あちこち痛むのでかわいそうでなりません。辛いときに傍にいてあげられなくてごめんね。また、こちらに行けるよう頑張ります。でも残念だったのは、このあいだは日帰り病院に行ったので、お母さんが眠っていて話せなかったこと。つかの間の時間、痛みから解放されているのに起こすのは忍びなかった。こんど行けるのは六月くらいかな。そのときまで、少しでも良くなるように案じております。千葉もいま雪が降って寒い日が続いています。お会いできる日を楽しみにしています。

平成二十年二月十八日 弘江

この少し前まで私は万華鏡を覗いていた。そのせいか、陽一が手紙を読むときに私に気をつかって幾つかの部分

ただだから。

あなたには苦労をかけたわね。みんなが遠くに行ってしまうって最後まで傍にいてくれて、「私はお嫁には行かないです」と母さんのそばにいるから」と言ってくれた。そんなことを口に出したのはあなただけよ。私はその気持だけで十分だった。やはりあなたには幸せになってほしかった。

だから、あなたが小樽でお見合いをして横浜に嫁ぐことになったとき、私は寂しいけれどすごく嬉しかった。小樽出身の和菓子職人の人に可愛がってもらって幸せに暮らしてほしかったから。

横浜に旅立つとき、あなたは私に贈り物をしていってくれたわね。開けてみて驚いた。それは貯金通帳と印鑑だった。中学を卒業してからすぐに働きに出てくれて、家にほとんどのお金を入れてくれながら、あなたはコツコツ貯金をしていたのね。

あなたはそのほとんどを置いていった。新しい土地で家庭を築くのに幾らお金があっても足りないでしょうに。でも私もあなたのために積み立てをしていたから、最後の日はお互いに貯金通帳を押し付け合ったね。昨日のこのよう。もうあれから三十四年。あなたは立派な母親になった。あなたの子どもたちは二人ともおおらかで優しい子だわ。大介くんは、お婆ちゃんは何でも知っているねと言ってく

飛ばして読んだのが分かった。「軽かったときき安心しました」という部分と「こんど行けるのは六月くらいかな」という部分を私に聞かせなかった。きっと弘江は四く五日前の、私の病状が深刻でないときに手紙を書いていたのだと思う。

それに六月といえば四か月も先じゃないの。それまで私がつもつと思っているのだろうか。陽一はちよつと腹立たしそうな顔をしたわ。でも院長と話した私の危機的な情報を知らせていなかったからやむをえないのかもしれない。でも四か月先はだめ。とても待てない。もつと早くにきてちようだい。

あなたは小さいときから、五人の中では背が高く、目鼻立ちもどことなくエキゾチックだといわれたわね。あなたはそれを疑問に思ったことがあるらしい。そんなとき私は答えたことがある。あなたは橋の下に置いてあつた揺りかごから拾ってきたのよ。

もちろんふざけて言ったのよ。でもあなたはどうかそれを全面的ではないにしろ少し信じたらしいわね。何年も経ってから聞いて驚いた。子どもに滅多な冗談は言えないのだと反省した。あなたは正真正銘の娘です。

このごろのあなたの顔はひどく私に似てきたわね。どちらかといえば彫りが深い顔立ち。こう見えても私はなかなかの美人といわれたのよ。だいたい私の母が深川小町だっ

れたし、智子ちゃんは、お婆ちゃんお願いだからまた帰らないですと家にいてちようだいと抱きついてくれたのがついこないだのようだわ。

あのころの私は太っていてパンダちゃんというあだ名をつけられた。一昨年に智子ちゃんが優しい旦那さんと子どもを連れて会いに来てくれたときは嬉しいやら驚くやら。何をビックリしたかって、若いときの弘江にあまりにもそっくりだったから。

弘江がいま抱えている事情を私は良く分かっているつもり。だけど、できれば六月より少し前に来てちようだい。私はそれまで生きていられるかどうか自信がないから。今までも何回かそう思ったことはあるけれど、今度こそそんな気がするの。私が生きているうちに顔を見せてちようだい。お願いします。

(九)

私の両手は悲惨なほど紫色になってしまった。それは何本もの点滴針のせいだった。た。た色がついただけじゃない腫れ上がってますます動かせなくなつた。

身体じゅうが痛いうえに両腕までもが動かなくなつたらどうなるのだろう。私は絶望感で胃がキリキリと痛みだした。看護師たちは困つた顔をして、腕に点滴がでなくな

つたら今度は足にする以外にないといった。陽一はいった。「何とかしなければならぬ。唯一動いている腕までがダメになってしまう。今度は足にするとなると、ますます歩行困難になるに違いない」

陽一は率直にいだいている危惧を師長に伝えた。彼女は困った顔をして部屋を出ていった。

そのとき陽一が東京と千葉から娘たちがくるという知らせをくれた。六月まで待てないという私の思いを陽一は感じ取ってくれて、もっと早く来るように言ってくれた。

娘たちも私がいよいよ危ないのではないかという危惧をもったみたいだけれど、気づくのが遅すぎると思う。母親がいつまでも生きていてくれるような幻想を抱いてはだめよ。お別れは必ず来るし、避けて通ることはできないのだから。

私はすぐに陽一を枕もとによんで、修也をとおして私の通帳からお金を用意させて頼んだ。遠くからくる娘たちは、それぞれがギリギリの生計のなかで暮らしているのだから、旅費の負担をかけたくなかった。私がその話をすると、陽一はなぜか泣きそうな顔をした。

娘たちがくる当日になって、私は何年かぶりで会えることを考えて興奮していた。このあいだは弘江だけが来たらしいけれど、眠っていたから顔を見ていない。今度こそちゃんと対面したい。この歳になるといつも子どもに会うたび

が冷たく輝いている。春が近いはずなのに雪が意地悪く降ってきた。そんな北国の夜はさぞかし寒いだろう。私は待つことに疲れきってしまい、涙がにじんだ重い瞼を閉じた。

次の日、陽一がナースステーションに事情を話してくれたおかげで、朝のうちから娘たちは会いに来てくれた。私は昨日のうちに涙が涸れるほど泣いておいたのでそのときは平静だった。号泣していたのは娘たちのほうだった。

とりわけ次女の昭江は私の前に深く身を屈め、長いあいだ帰郷しなかつたことを繰り返して詫言を述べた。私は声がかすれ思うように話すことができなかつたけれど、宥めるように首を横にふった。冬のさなかにこうして会いに来てくれたのだから、それだけで十分だと伝えていた。

私は自分が良い母親だったとは思わない。ずいぶん子どもたちには苦勞をかけた気がする。三十九歳で夫と離婚したとき、昭江には高校を中退させたし、弘江は高校に入れてあげることができなかった。私も死ぬほど苦しい思いをしたけれど、子どもたちひとりひとりとつても、さぞ寂しく悔しい思いをする日々だったと思う。

十七歳のときに昭江が突然いなくなつたのも、その延長線上にあつた気がする。私は昭江がいなくなつた二日後に警察に捜索を依頼した。見つからなかつた期間の不安な気持は何にもたとえようがないものだった。睡眠はほとんど

に思ってしまう。今度こそ愛する子どもたちを見る最後になるだろうと。

万華鏡を覗くと、羽田空港で娘ふたりが飛行機に乗る手続きをしているのが見えた。ずいぶん太つた昭江は足をひきずるようにして大きな荷物を預けていた。細身で丈夫な弘江が姉の残りの荷物を持って搭乗口を歩いていく。

飛行機のなかでも二人はもつぱら私のことをあれこれ心配していた。それと同時に弟夫婦に負担をかけていることを反省し合っていた。新千歳空港に夜の八時半ころに着いたとき、迎えにいった陽一と数年ぶりの対面を果たした。

三人は陽一が運転する車に乗ってまっすぐ病院に来ようとしている。丸い筒の中に彼らの姿が見えるようだった。偏光した映像は凸レンズを通したみたいに少し歪んで見えた。もうすぐ会えるのだ。私は幼子のように興奮していた。だが、そう思ったとたん病院のあらゆるドアが閉められる音がした。もう間に合わない。今日のうちに会えるという希望は絶たれた。

まもなく三人は病院に着いた。病院のすべての出入口は防犯のためにどこも厳重に締められてしまつたあとだ。従業員出入り口も中からしか開かないようになっていた。三人が暗い病院の周りで、入り口を求めて何度も何度も捜し廻っていたのが見えた。

残念そうに顔を見合わせる様子が映っている。外には月

とれなかつた。たえず心臓の音が聞こえた。自分を責めて責めて責めぬいた。若い娘の気持ちをつかたてあげられなかつたのが口惜しくてたまらなかつた。

だから十日ほどあとになって東京のセツ姉さんのところにあなたが身を寄せたと聞いたときは心底安堵した。私は爆睡した。溜まりに溜まっていた疲勞が布団に山となって溢れたと思う。

あれからあなたは東京で仕事を見つけ、やがて部屋を借りて自立した。好きな人ができたから結婚したいという知らせを受けたのは五年もたつたころだった。あなたはすっかり東京の人になつていた。

そのころ私は小樽の外科病院に賄い婦として勤めていたけれど、ちょうど母親が死んで、無理やり休みをもらつて葬儀に出席してきた直後だった。帰ってきてすぐに私は体調をくずして寝込んだ。これ以上仕事を休まれたら困ると病院の奥様にクギをさされた。

私はあなたの結婚式にとうとう出られなかつた。どんなに残念だつたことか。悔しくて泣いた。まもなく送られてきた写真を眺めたとき私がどれほど嬉しなかつたことか。優しそうな旦那さんと寄り添っているあなたの顔を見てどんなに安心したか分からない。幸せになれて良かったねと何度も写真に向かって言っていた。

そのあと、あなたは四人もの子どもの母親になつた。小



さな体のあなたがお母さんだなんて。あなたは過去の辛かった時期の苦悩をバネにして子どもたちを立派に育てあげた。だからこうして北海道に来ることも複雑な思いがあったことだろう。

あなたが泣きながら電話で陽一に話していたのを私は知っている。「自分は北海道を捨てた人間だ。故郷を勝手に捨てた。だから帰れない。素直に帰れないのだ」とあなたは言った。元気なときは忘れていたはずなのに、何かのストレスがかかると一気に昔がよみがえるのでしょうか。

その気持ちを押し付けて来てくれた。本当にありがとう。年月は途方もなく経っているけれど、昨日のこのように心の傷としてどこかに封印されているのだと思う。私は目を閉じて今あなたに語りかけます。

母からむすめへ

あなたとの出会いは何と劇的だったことでしょう。あなたが神の息吹によつて生命を受けたとき、わたしはまたあなたを知りませんでした。あなたがわたしの傍らに、まさにわたしの中にあることがわかっていても、あなたの顔を見ることができませんでした。でも、あなたがわたしを愛しており、わたしもあなたを愛しているのは確かなのです。わたしにとつて、あなたと出会うことは、喜びと期待とが不安の衣をまとつて歩き回っていたようなものでした。でもやがて、あなたが大きいなる叫びの中

から現れたとき、わたしの苦痛もその叫びとともに過ぎ去りました。小さな、涙が出るほど小さなあなたでした。傍らに連れてこられたとき、わたしはどれほど深い愛と厳肅さに包まれたことでしょうか。あなたが傍に横たえられたとき、あなたがわたしを慕っていることはすぐに分かりました。わたしも深くあなたを愛していたからです。なぜなら、わたしたちは一年近くも文通をしていたのですもの。文字どおり血の通つた文通を。それは本当に心の文通、魂の文通でした。十年が過ぎたころ、あなたはわたしの背丈に迫りました。あなたの空のようなおちかさと海のような優しさは貴重です。あなたは以前、わたしにとつては小さな赤ちゃんでしたが、今は知識と理解を増し加え人の思いを見抜く洞察力さえ身に付けつつあります。あなたはわたしにとつて必ず力強い友になる。

わたしの涙と笑いを受け止める器となる。あなたが嫁ぐ日にわたしは病の床にありました。十代で家を出ていったあなたが、遠くの地で愛する人と笑っている写真が静かにわたしを見つめています。あれから何度この北の地でわたしは冬を迎えたことでしょうか。あんなに病弱だったあなたが四人の子どもの母になるなんて。許してね。わたしはあなたにとつて、けつして良い母ではなかったのかもしれない。嵐に揉まれながら、たつたひとりだけで育ててきたわたしは立つことさえやつとだった。遠い地

## (一〇)

にいるあなたを助けにゆくこともできなかった。今わたしは老いさらばえました。病の床がわたしの終日の友になりました。あらゆるものが薄く見え、音もかすかで、静寂の世界がわたしを囲んでいます。でもハッキリとわたしはわかる。あなたの顔、あなたの手、あなたの声が、そしてあなたの心が伝わってきます。あなたと初めて魂の文通をしてから何年になるのでしょうか。わたしはもう九十歳。あなたもお婆ちゃんの仲間入りね。手を握っていて。わたしはもうすぐ旅立つわ。でもけつして忘れな

いで。あなたがわたしの中にいたあの日からいつも絶えることなくあなたを愛していたことを。

外に用事をたしにいっていた陽一が病室に入ってきたとき、傍らに昭江がいて、しっかりと私の手を握っていたのを、陽一は感慨深げに見つめていました。

二人は眠っているように見えたでしょう。でもそうではなかった。握られた細いふたりの手からは熱いものが流れていた。何十年もの心のしがらみを溶かし去ってしまう魂の血が流れていた。

それを私と昭江は交換していた。私は陽一に言った。このことを書き記してほしいと。偏光玩具を通して見たことは私の魂の叫び。だから。それをしっかりと書きとどめてほしいのだと。

北国の桜が散った。そのころ雪乃の周りは賑やかだった。小樽から登美江が泊まりにきてくれていたし、再び会いに来た昭江もいる。そして陽一と佐代子と修也も雪乃を取り囲んだ。

その日の雪乃は珍しく食がすすんだ。意識が明確ではないのに口だけが動く。しかし体力はますます低下しており痛みや苦痛も相変わらずだった。昼食が済んでから、その日一日を通して雪乃は眠りが覚めない状態で同じ言葉を口走った。

「なんとかならないかねえ。なんとかならないかねえ。なんとかならないかねえ」

尊厳死について何度も語ったことがある雪乃だったが、やはり生きたかったに違いない。深い死の谷に突き落とされて小さな小枝に掴まりながら叫んでいたのだろう。しかし、もはやその小枝を握る力さえ残っていないようだった。

雪乃の思考はすでに大部分が破壊された状態が続いた。これから正常な思考を取り戻す時間はますます短くなるだろう。このころからしきりに「花屋には注文したか」とか「熱い、熱い、火が熱い。水をかけて水をかけて」という言葉が口に出た。

それが何を意味するものかは周囲にいる誰も分からなかった。美唄の炭鉱町で三度の火災にあつてゐる。そのため学業を諦めて小樽に奉公に来た。そんなときの記憶が溶け出しているのだろうか。それとも必ず訪れる自らの葬送を思い描いているのだろうか。

もう雪乃には体力と呼べるものはほとんど残つてはいない。水を一口飲むのにも息がぎれた。目は大きく落ち窪んでおり、紫色のくまは彼女の内臓の疾患をよく表していた。声は虫の声のように小さく、細い腕が点滴針の跡だらけの痛々しさをもつて胸元に黒い茄子みたいに置かれている。

「重たい、重たい」

薄い毛布が体に乗っているだけなのに雪乃にはそれがたまらなく重く感じるのだろうか。しきりにそれをよけようとする。陽一が首までかかった毛布を少し下げてやると気がおさまったようだが、すぐに別のことを言い始めた。

「とつて、とつて」

「何をだい？」

「とつて、とつて」

「何がほしいの」

「ま ん げ きよう」

「ああ万華鏡ね。すぐとつてあげるよ」

暫らく放つておいたのでそれは柵の奥でタオルの下になつていた。陽一はベッドを操作して枕の位置を高くしてあ

げた。そうして雪乃がお気に入りの玩具を目の前に差し出した。しかしそれを受け取る力が残っていないのだつた。雪乃は目で切なそうに訴えている。私には力がないから持つてくれないかと言つてゐるようだ。陽一はすぐに察知して答えた。

「ああ、いいよ。ゆっくり見てね。ずっと持つていてあげるから。どうだい。きれいだろう」

雪乃は静かにうなずいた。覗きながら半分眠つてゐるようにも見えた。それで陽一が万華鏡を雪乃の目線から外そうとすると首を横に振つた。

雪乃の体は枕からずれて知らずに傾いていった。体を支える最後の力が消え去つていくのだろうか。陽一は手を伸ばし小さな肩が下がらないように支えた。雪乃が声にならない声で静かに口を動かしている。陽一の耳には、もはやその声は聞き取れなかつた。

みえる

みえるの

いよいよだわ

わたしには判る

もうこんなに苦しく

痛みをとまなう日々と

おさらばしたい

そりゃあ、元気になつて

故郷の美唄に行きたかつた

笑われるかもしれないけれど

ヨン様のいる韓国にも行きたかつた

でももういいの

九十歳まで生きさせてもらつた

正直言つて疲れはてた

もう休ませて

子どもたちは願つてくれている

百歳までも生きてほしい

できればそれ以上まで

もう無理だと思ふ

わたしの身体のネジは全部ゆるんだ

あつちを直せばこつちが駄目になる

もはやどうにもならない身体

辛いよ 息をするのも

水を飲むのさえ苦痛なの

このごろは残つていない

好きな万華鏡を持つ力も

看護師さん呼び出す小さなボタン

それさえ押せなくなつた

もういいのよ

わたしの子どもたち

こんなにしてくれたのだから

遠くから来てくれて本当にありがとう

サヨちゃんは疲れて具合が悪くなつたごめんさい

ごめんさい

陽一のためにも

一人娘の由紀ちゃんのためにも

元気でいなければ駄目よ

そして言わせて

ありがとう ありがとう

あなたはわたしの愛する四人目の娘

長い間わたしにしてくれたこと

それは死んでも忘れない

わたしは間違いなく旅立つ

みんなにお願ひがあるの

故郷の美唄川に流してちょうだい

わたしの骨粉を少しでいいから

美唄の我路で生まれて

十五歳までいたあの炭鉱町

わたしの真の故郷に

今は昔の面影は何もない

新しいきれいな家も少しは建つてゐる

美唄川はわたしの母なる川

帰りたい あのところ

帰りたい 故郷に